

# 連載 第14回 福聚山史

篠原重一文  
及川一晋編

## 本山と常円寺

### 2、当山住職の本山への晋山

次に、常円寺から本土寺の住職へと晋んだお上人方などを本土寺の記録より探し出してみた。

〔本山二十五世 慈妙院琢心日雄上人〕

中村檀林五十代化主（＝当時の日蓮宗最高学府校長）。享保十一（一七二六）年四月六日、常円寺において入寂、五十六歳。

〔本山四十世 養苗院快達日周上人〕

中村檀林二百七代化主。常円寺二十二世より晋山。文政四（一八二二）年十一月十日、市谷修行寺において入寂。

〔本山四十七世 善種院養直日豊上人〕

金沢の人。中村檀林二百七十代化主。常円寺二十六世より晋山。上人の時代に明治維新に遇い、排仏毀釈を味わう。平賀はその思想の発生源ともいべき水戸の菩提寺であったから、その波は烈しく、朱印地の没収はもとより境内地においては建物の雨垂れ落ちまで失い、四院・六坊のほとんどは消え、諸堂も次第に荒廃

するにまがせるしかなかった。明治十五（一八八二）年十二月十三日、市谷修行寺において入寂、八十四歳。

〔本山四十八世 精進院寿瑞日解上人〕

備中稻荷の人。秋山氏。常円寺二十九世より晋山。明治十九（一八八六）年九月九日、常円寺において入寂、六十七歳。

〔本山五十二世 体妙院龍妙日意上人〕

金沢の人。斉藤氏。日豊の弟子。常円寺三十二世より晋山。明治四十（一九〇七）年九月二十四日、常円寺において入寂、七十六歳。

〔本山五十五世 王子院真能日龍上人〕

下総の人。及川氏。大正十年六月十日、常円寺三十三世より晋山。長く莫統会の総裁として法縁の中心にあり、育英の志篤く、多くの子弟を育成す。その中に英才多く、柴田一能・山田一英・木村日記等は宗史に名を残す。また、能筆をもつて知られる。昭和三年、京都大本山本願寺へ加歴され、同十二年三月二十日、常円寺において入寂、八十四歳。

〔本山五十六世 本覚院一英日真上人〕

越前の人。山田氏。日龍の弟子。大正十

三年、常円寺三十四世より晋山。昭和十八年、京都大本山妙顕寺へ晋む。昭和三十四年、日蓮宗管長となる。昭和四十一年十一月二十一日、京都において入寂、九十四歳。

このように本土寺二十五世日雄上人が



本土寺 像師堂より裏庭をのぞむ(宝文館出版『日蓮宗の寺めぐり』より)

記録に残る常円寺との関係を示す最も古いものである。日雄上人は本山で住職を務めた後、享保十一年に常円寺で入寂している。このことから記録には残っていないが、これより以前から本山とは深い関係があったものと推察することができる。また、文化文政期（一八〇三年）には、本山の四〇

世住職を務めることになる日周上人が常円寺を出て、中村檀林化主を経て本土寺にお入りになっている。それ以来、常円寺の住職を務めることが本山へ晋むための一つの登竜門となったようである。また、それとは逆に本山でのお役目を終えたお上人方の隠栖の地が常円寺ともなつた。さらには、明治以降は常円寺の住職がすなわち本山の住職をも兼ねるようになったたようである。そういった本山本土寺と末寺常円寺の交流は長きにわたり頻繁に行われ、昭和初期まで続いたのである。

(つづく)